
三匹のドラゴン その4

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三匹のドラゴン その4

【Nコード】

N0620L

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

博物館の館長は、なんとドラゴン族の末裔だった。ドラゴンの細胞を手に入れた館長は、その力を復活させてしまう。絶体絶命のブラウンとヘンリー。

そこへ謎の男ルドルバが現れ、二人を救う。彼はいったい何者なのか…？

作：青木弘樹

ブラウンとヘンリーは、まさに「蛇ににらまれた蛙」状態だった。ドラゴンは二人の乗ってきた車に向かって炎をはいた。

”ブワアア！”

「ああ！」

車は燃え上がり、あっという間に焼け焦げた。

「ふふふ、次はお前らの番だ」

ここで死ぬ…。二人はそう思った。しかしその時、

”パン！”

何か玉のようなものが飛んできて、ドラゴンの顔に当たり、紫色の煙があたりに広がった。

「ぐわっ」

ドラゴンは手で顔を覆った。

「こつちだ！ブラウン！」

誰かが叫んだ。そう、ブラウンたちを尾行していた男だ。しかし
いったい誰なのか？

「もたもたするな！さっさと来い！」

二人はとりあえず男のほうに走った。車はオープンカーになっていた。どうやらルーフが開閉するタイプのスポーツカーのようだ。
「うぬぬ…」

ドラゴンは動きが鈍くなっていた。どうやら催涙ガスのようなのだ。

ブラウンとヘンリーは車に乗り込み、車は走り去った。

「つたく、なんなんだよ、あれは？」

男が聞いた。

「あれは…ああ！お前は！ドクター・ルドルバ！」

ブラウンが叫んだ。

ドクター・ルドルバ。大学時代のブラウンの同級生。大学卒業後、数年間いっしょに研究をしていたが、ルドルバはある日突然、姿を消す。博士号の持ち主。ブラウンは博士号は持っていない。

ヘンリーは初対面。ただし名前くらいは聞いていた。

「ルドルバ、生きてたか…」

「当たり前だろ」

「さっき何をしたんだ？」

「催涙ガスだよ」

「催涙ガス…」

「それより何なんだよ、あの化け物は？」

「ああ、あれは…」

ブラウンは今までのいきさつを話した。

「へえ…タイムマシンねえ…またご大層なものを作ったな」

「しかしこんなことになるうとは…」

「まったく…ようやくお前の所在を知って、車を見かけたから追いかけてきてみたら…」

「ルドルバ、改めて紹介するよ。こちらはヘンリーだ」

「ヘンリーです。よろしく」

「ああ、ルドルバだ。よろしくな」

ルドルバはそっけない態度だった。

「もしかして…イザベラが言ってた隣町に引越してきた変なやつって、お前か？」

「変なやつ？失礼な言い草だな。この天才ドクター・ルドルバ様に向かって」

「ははは、相変わらずだな」

ブラウンは少しうれしそうだった。

「ところでこの車は何なんだ？見たことも無いが…」

ヘンリーが聞いた。

「いいだろ？来年、アメリカで発売になる新型車の試作車だ。すこ

い機能が付いてるんだぜ」

「どんな機能だ？」

「それはまあ、今は言えないけど、とにかくそのうち日本でも発売されるかもな」

そんなこんなで、車はブラウンとヘンリーの研究所に着いた。

「ありがとう。助かったよルドルバ」

「礼なら金がいいな」

「分かった分かった。今度おごってやるよ」

「じゃあな。何かあったら連絡くれ」

ルドルバはブラウンに連絡先を書いた紙を渡した。そして去っていった。

その頃。フォックスは人間の姿に戻っていた。そして博物館の地下にある秘密の部屋で催涙ガスの効き目がなくなるまでじっとしていた。

「おのれ…人間め…」

ブラウンたちは、家で一息ついていた。

「しかし、とんでもないことになったな」

「ああ」

「ドラゴン族の末裔とか言っていたが…」

「なぜ人間の姿でいたんだろうな？」

「分からん…。過去に何らかの形で人間社会に溶け込んだか…突然変異か…」

「どっちにしても、やっかいな化け物を、俺たちは生み出してしまったわけだな…」

「そういうことになるな…」

二人は憂鬱だった。

「ところであのルドルバとかいうやつ、何者なんだ？」

「あいつは…自分でも言っていたが天才だよ。ビーム粒子の安定化

も、元はといえばあいつの功績だし、俺なんて到底かなわない」

「けど君はタイムマシンを作ったじゃないか」

「たぶん…あいつなら作れるよ」

「そんなにすごいやつなのか？」

「ああ。まあ、人間的にはちよつと問題あるかもしれないがな。むかし噂に聞いたただけだが、あいつは最新の武器を作っては紛争地域に密かに売りさばいたりしていたらしい。相当儲けていたらしいよ」

「死の商人か。ろくなやつじゃないみたいだな」

「そうかもしれないが…人はずば抜けると、悪人になるのかもな」

「あいつをほめてるのか？」

「いや…」

二人はしばらく黙った。

「…これからどうする？ブラウン」

「そうだな…ルドルバの手を借りて、あのドラゴンをやつつけるしかないんじゃないかな。俺たちの持つてる武器はサーベルだけ…。こんなものでは勝てない」

「まあ…あいつなら色々あやしい武器もってそうだけだな」

「ああ」

「けど大金ふっかけられそうだなあ」

「それも仕方ないさ」

「あゝあ、せつかくこれから悠々自適に生きていけると思ったのになあ」

「金に目がくらんだ罰かもな」

その後、二人はフォックスに襲われてもいいように、地下室で寝た。地下室は二人だけが知る倉庫だ。造りもなかなか頑丈だった。

翌日。二人はイザベラを呼び出した。そして事の一部始終を話し、しばらくうちに来ないように伝えた。イザベラは最初信じられないようだったが、二人が嘘をつく理由も無いので信じた。

そしてルドルバに連絡を取り、隣町のルドルバの研究所へとバス

で向かった。

ここはルドルバの研究所。

「よお、よく来たな。まあ入れよ」

ルドルバは笑顔で迎えた。あまりドラゴンのことは気にしていな
いようだった。

「……」

二人は研究所（兼住居だと思われる）の内部を見て驚いていた。
「すごいな……」

見たことのない機材がたくさんある。

「さすがだな、ルドルバ」

「ん？まあな。どれも高いから、壊さないでくれよ」

「ところで、なんで日本に？」

「ちよつといろいろあつてね……」

「武器商人なんかやつてるから、やばくなって逃げてきたんじゃないの
のか？」

ヘンリーが言った。

「ま、そうかもな」

ルドルバは、嫌味にもこたえてないようだった。

「ちっ」

ヘンリーはルドルバをあまり気に入ってないようだった。

「なあルドルバ、俺たちはあのドラゴンを倒したいと思ってる。協
力してくれないか？」

「協力ねえ……」

「お前だって狙われるかも知れないんだぞ」

ヘンリーがつつかかった。

「まあ、お金しだいだな」

「……」

ブラウンも少々呆れていたが、とりあえずフォックスにもらった
二千万円があるので、いろいろ聞くことにした。

「わかったよ。何か武器はないか？出来るだけ強力なやつ」

「武器ね。まあ、いくつもあるけど」

「聞かせてくれ」

「そうだな、これなんかいいんじゃないか？F5型バズーカ」

「F5型？5型まで作ったのか？」

「ワシントンの俺の本拠地には最新の7型もあるぜ」

「すごいな……」

「けどまあ一番はやっぱりこれだろうな。超小型ナパームボム・改良型」

「それは……」

「そう。昔作ったやつの改良型だ。威力はざっと前のやつのお3倍つてとこだな」

「……」

ブラウンはただただ驚いていた。ヘンリーは、すごいとは思いつつも、認めるわけにはいかないという態度だった。

「やっぱりすごいなお前は。じゃあその二つを譲ってくれ」

「そうかい？そうだな……お前は古い知り合いだから、友情価格で……」

「二つで500万でどうだ？」

「500万だと？ふざけるな」

ヘンリーが叫んだ。

「戦争の道具ばかり作ってるくせに、調子に乗るんじゃないぞ」

「ヘンリー……」

「あんた……やけに俺につつかかってくるけどさ、あの化け物を生み出す要因を作った本人なんだから、あんまり偉そうなこと言えないんじゃないの？」

「俺は故意にやったわけじゃない！」

「故意だろうと何だろうと、結果がすべてさ。そのうちあの化け物が町を破壊したりしたら……」

その時

”バンッ！”

イザベラが突然入ってきた。

「イザベラ!? どうしてここが?」

「はあはあ、そんなことより、テレビないの!?!」

見ると、はしっこのほうにテレビがあった。イザベラは急いでテレビをつけた。

「どうしたんだ? そんなに慌てて…」

三人はテレビを見てみた。

『ご覧ください。巨大な竜のような生き物が、町を破壊しております。まったく信じられない光景です。いったいあれはなんなんでしょうか?すでに死傷者は数十名にもおよぶと伝えられております。テレビをごらんの皆さまはくれぐれも南地区には近づかないよう、お願いいたします…』

「!?!」

なんとドラゴン（フォックス）が町を破壊していた。

「これは…!」

「これ、あなたたちの言ってたドラゴンよね?」

「ああ…そうだ…」

「ブラウン、ヘンリー、あなたたちの研究所は壊されていたわよ」

「なに!?!」

「くっ!?!」

「ほづら、とうとうあの化け物が暴れだしたぞ」

「…」

四人はしばらくテレビに見入っていた。

「分かったよ」

ヘンリーが口を開いた。

「俺たちが退治してやる。なあブラウン」

「あ、ああ…」

「金はちゃんと後で払うから、とりあえず武器貸しな」

「後払いか…まあいいだろう」

「ちょ、ちょっとあなたたち、まさか…」

「イザベラ、これは私たちの責任でもある。いかねばなるまい」

「そ、そうかもしれないけど…」

「大丈夫だイザベラ、俺たちは経験済み（ドラゴンとの戦いのこと）だ。な、ブラウン」

「ああ…」

ヘンリーはバズーカ、ブラウンは改良型のボムを手にした。

「ルドルバ、車を貸してもらえないか」

ブラウンが言った。

「いいぜ、ただし前に見せたあのしぶいのは駄目だ。もう一台のほうを使いな」

ルドルバは車のキーをブラウンに渡した。

「すまない」

二人は足早に出ていった。

「…」

イザベラは引き止めたかったが、引き止める間もなく、二人は出ていった。

「さてと…」

「ちよつと…あんたはどうして行かないのよ？」

イザベラはルドルバをにらんでいた。

「どうしてって…俺には無関係だろ？」

「ブラウンと知り合いなんでしょ？冷たい人ね」

「まだ死にたくないんでね」

「…」

「コーヒーでも飲むか？」

「要らないわよ」

イザベラは出ていった。

「…」

ルドルバは少し気にしていたようだが、お腹がすいたので、冷蔵庫をあさった。

車内。二人は南地区を目指して走っていた。

「大変なことになったな…」

「そうだな」

「どう戦う？」

「俺が注意をひきつける。隙を見てそのボムをぶつけてくれ」

「前回と同じ作戦か」

「ああ」

「しかし今度の奴は人間の知能も持つてるんだぞ。うまくいくかな？」

「逆にうまくいくんじゃないか？」

「なぜだ？」

「今回は会話ができるわけだろ？注意をよりひきつけることが出来る」

「なるほど…」

「頭のよさが命取りになるのさ」

「うまくいくといいが…」

「俺が一人で来たように見せかける。ブラウンはくれぐれも見つからないようにしてくれ」

「分かった」

「俺たちは…今まで二人で何でも乗り越えてきた。きつとうまくいく…！」

「そうだな…分かった」

「ヒーローになって、有名になってやるうじゃないか」

「ふふふ、そうだな」

二人は、感覚が麻痺しているのか、少し楽しそうだった。あるいはヤケクソなのかもしれない。だが二人はお互いを信頼していた。そして車はドラゴンの元に近づいていった。

南地区。

「見えてきたな」

見ると、火の手が上がっている。壊れている建物も無数にある。人影はまばらだ。みんな逃げたか、あるいは殺されてしまったか…。「いたぞ！」

1キロほど先にフォックスを見つけた。

「ブラウン、君は見つからないように後ろから近づいてくれ。おれは正面からいく」

「分かった。しかし、くれぐれも無理はするなよ」

「ああ」

ブラウンはボム、ヘンリーはバズーカを持ち、それぞれ別れ、作戦を決行した。

”ドーン！ドーン！”

「わははは！」

我がもの顔で歩くフォックス。

「人間ども、逃げまどえ！」

そこへ、ヘンリーはバズーカをぶっ放した！

「なに？」

”ドーン！”

フォックスは翼でバズーカの弾を防いだ。爆発はしたものの、やはり翼は強力で、フォックスは無傷だった。

「何者だあ！」

フォックスが叫んだ。

「俺だ！フォックス！」

ヘンリーはフォックスの目の前に現れた。バズーカの弾はあと2発…。

「きさまは…ヘンリーだったな。のこのこ現れよって！」

「黙れ！この化け物が！」

「ぐふふ、今度は逃がさんぞ。そんなチンケな武器で俺に勝てると思っつか？」

「ああ。俺はお前の弱点を知ってるんでな」

ヘンリーはハッターをかました。

「弱点？この俺にそんなものがあると思っっているのか？」

「……」

「ところでブラウンはどうした。瓦礫と化した己の研究所の前で、泣き崩れているのか？」

「あいつは今、知り合いの研究所でお前を倒す武器を作っている。お前は結局負けるんだよ、この化け物が！」

ヘンリーはフォックスを挑発した。より自分に注意を向けさせるためだ。

「口の減らない下等な人間が……」

「くらえ！」

ヘンリーはバズーカをぶっ放した。

”ドーン！”

しかしまたもや強力な翼に防がれた。

「ぐふふ…バカなやつよ。ハツタリで俺様に勝てると思っっているのか？くらえ！」

フォックスは炎を吐き出した。

”ブオオオ！”

「くっ！」

ヘンリーは何とか避けた。しかし、

”ビュっ！”

フォックスは尻尾で攻撃してきた！

”ガシィィ！”

「ぐわああ！」

ヘンリーはとっさにバズーカで防御したが、5メートルほど吹っ飛んだ！

「うぐぐ…」

「ぐふふ…」

ヘンリーは立ち上がることが出来なかった。

「死ね！下等生物！」

その時！

”ドオオオン！”

ブラウンがフォックスの横から現れ、ボムを投げつけた！ボムは大爆発を起こした！

「ぐわあああ！」

もたえるフォックス。あまりの威力に、ブラウンも思わず転倒した。

「す、すごい……」

あたりに黒い煙が立ち込めた。

「や、やったのか？」

よつやくふらふらになりながらもヘンリーは立ち上がった。

「ヘンリー！」

ブラウンがヘンリーの元へと近づいた。

「大丈夫か？ヘンリー！」

「へへ、大丈夫じゃあないな……とてもじゃないが……」

「しかしやったぞ！作戦は成功だ！」

「ああ……」

しかし……

「ぐぬぬ……おのれ……」

なんとフォックスは生きていた。左腕と左の翼を失いながらも、生きていた！

「……！」

二人は戦慄した。

「許さんぞ……！貴様ら……！骨も残らず丸焼きにしてくれる！」

フォックスは大きく息を吸い込んだ。

「ブラウン……俺はもう駄目だ……お前は逃げる……逃げて……ルドルバに……」

「ヘンリー！」

ヘンリーは倒れた。

「ヘンリー！」

絶体絶命のピンチ！

「死ねええ!!」

その5へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0620/>

三匹のドラゴン その4

2010年10月8日15時07分発行